上領八幡宮と湧井戸ナマズ

（地域に伝わる伝説です。）

むかしむかし、上領に湧井戸がありました。上領の峠付近の田畑をうるおし大川に流れていく水源地でした。ところが、年月が経ち、水の湧く量が少なくなってくると、井戸のまわりで不思議なことが起こりました。井戸の周りで遊んでいたニワトリやハトが、スースーと井戸の中に吸い込まれるのです。

困った村人たちは集まって、湧き井戸の井戸替えの相談を始めました。すると、一人の白ひげの老人がやってきて、村人たちに話しかけました。

「ときに、お前さんたち、今日は何事かな？まさか沸き井戸の井戸替えじゃあるまい。」

「そうですよ。」

と村人が答えました。老人は驚いたような顔をして、

「馬鹿なことをするんじゃない。こうした古い井戸には必ず主がすんでおる。その主だけはつかまえずにおいておかないと。どんなたたりがあるかわからんぞ。」

と言いました。

そのうち、村人たちが出した赤飯を食べ終えた老人は、

「最後には水が枯れてしまうぞ。」

とたしなめてその場を立ち去っていきました。

翌日、村人たちは総出で井戸の上に木を組み、中のどべを取り出しました。井戸の底が見え出した頃、真っ黒い大きなナマズが現れました。

村人たちは、井戸替えが終わったので、とれた大ナマズを酒の肴にと料理を始めました。すると、なんと大ナマズの腹の中から、赤飯が出てきました。村人たちは昨日の老人のことを思い出し、大騒ぎになりました。老人がナマズの化身だとすると、たたりがあるかもしれないと言い出す者も出てきました。

そこで、一同相談し、祠をたててナマズの霊をまつることにしました。これが上領八幡宮のはじまりです。その井戸は最近まで上領の道端にあったそうです。